
花の少年物語

コクロル

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

花の少年物語

【Nコード】

N1931U

【作者名】

コクロル

【あらすじ】

ある日少年は夢を見る……。何も無い真っ白な空間、その奥にはぼんやりと人影が現れ少年に助けを求める。一人人影の正体とは？そして少年は助けることが出来るのか？さらにそこへ出てくるスキマ妖怪、少年は幻想郷へと飛ばされてしまう。飛ばされた先では何が待ち受けているのか？

この作品は私の書いている『東方の花畑』を書き直した作品です

第零話 プロローグ（前書き）

どうも、コクロルです。

この作品を見ていただき感謝です。

東方の花畑を知っている方はまた同じ内容を読むことになるかもしれません。

それではどうぞ

第零話 プロローグ

～幻想郷～

日本の人里離れた山奥の辺境の地に存在するとされる。ここには妖怪などの人外が多く住んでいるが、僅かながら人間も住んでいる。幻想郷は強力な結界によって幻想郷外部と遮断されているため、外部から幻想郷の存在を確認することはできず、幻想郷内に入ることもできない。同様に幻想郷内部からも外部の様子を確認することはできず、幻想郷から外へ出ることはできない。そのため、幻想郷では外の世界とは異なる独自の文明が妖怪たちによって築き上げられている。

～wikiより抜粋～

～SIDE???～

「やっと……やっと見つけたわ……」

ふふっ、ついにこの日が来たのね……。

思えば長かったわ、あの子を見つけるのがこんなに大変だなんて思わなかったもの。まあ、見つけることが出来たのだし良しとしましょうかしら？

それに……。やっとこの暇な数十年が終わると思うと笑いが止まらないわ。

「さあ、私を楽しませて頂戴。」

さて、あの子はどこまで私を楽しませてくれるのかしら？この私をガツカリさせないでね。

「綺麗な花を咲かせなさい、あの時のようにね……」

第一話 夢に出てきた彼女

「この式をこっちに代入するんだぞ、ここ間違えやすいからな」

そうやって喋っているのは数学の授業を担当している先生。そして、俺はというと……

「黒鎚！！授業中に寝るないつも言ってるだろう」

ガン

「……はい、すみません」

寝てましたはい、ぐっすりと寝てました。

「……痛いじゃないですか、教科書の角とか凶器でしょ」

俺、黒鎚陽炎は先生に訴えた。

「寝るお前が悪いんだ」

キッパリと言う先生、悪いのは俺のほうなので反論できなくなる。反論できないのを見た先生は俺にこう言ってきた。

「寝てたということは、私の授業は聞く価値も無いと言う事だな？ならばこの問題を答えてみろ」

そういつて黒板に問題を書く先生。クラスメイトは笑っている。おい……笑うくらいなら助ける。

書かれた問題を見て………は？るーと？えつくす？何だそれ？……全然分らない。

「わかりません」

「ならば授業をきちんと聞け!!」

ヒュッ ガッ

額にチョークが当たり俺はそのまま意識を失った……。

『……す……い……』
ん？

気がつくとももない真っ白の空間に俺は立っていた。そして奥のほうにぼんやりと人影が見える。

『たす………くださ……』

そこにいるのはだれだ？

人影がだんだんはつきりとしてくるが、まだぼやけてる

『お願い………けてく………さい』

聞こえにくいな………もう少し大きく。

そう思うとぼんやりとしていた人影はくつきりとし始め、現れたのは綺麗な女性だった。

『お願いです助けてください………』

その女性は俺に助けを求めているようだ。

しかし彼女の奥にはまだ人影があるように見える。

『私たちをどうか………どうか………』

しかし彼女はだんだんと透けて消えていく。

『声が聞こえ………裏山の………るい墓石に………』

その言葉を最後に彼女は消え去った。彼女の残したキーワード裏山と墓石。

裏山は分かるが墓石は何だ？まあとりあえず放課後、裏山に行くことにしよう。

そこで俺の意識はまた途切れた

「ちゅーちゅーちゅー……!!!!!!!!!!」

「!?……何だよ」

耳もとで叫びやがって、ビツクリするだろが。

「なんだよも無いだろ！！昼飯食いに行こうぜ！！」

先ほどからうるさいのはこの学校一の馬鹿である田中 太一

「違うぞ黒！俺は馬鹿でも田中でもない！！！」

……こいつは『カン』だけが鋭い、葛城隆司何かと突っかかって来るウザイ奴だ。

「ああそうだったな」

そういうば田中じゃないな。そして昼飯の誘いか……

「俺は！ただお前と学食を食いに行きたかっただけなんだ！」

うるさい田中はまだ「ごちゃごちゃ」言っているが一切無視して

「ふーん、でも大丈夫だ俺は弁当があるから」
と言っておくるとこいつは明らかにガツカリして

「……な、何だと」

そこに追い討ちをかける

「だから一人で行って来い」

「くっ、今日は諦めてやる、だが次は無いと思え！！バカヤロー！
！」

すると田中は泣きながら、悪役の台詞を口にしつつ走って何処かへ
といってしまった。

あの騒動も終わり、学校も終わるころ校門では一人の少女が黒の帰
りを待っていた。

「『今日は用事ができた、さき帰ってる。』お兄ちゃん……」

そう呟いたのは、黒鎚^{くろつちあけみ}暁美陽炎の妹だ。携帯を閉じ、ため息を漏ら
す。折角一緒に帰れると思っていた所にこのメールの文章、落ち込
んでも仕方ないだろう。

「仕方ないか……」

そういつて暁美は一人帰路に着いた、だが少女は知らない。
このメールが兄と交わした最後のやり取りだということを……。

第二話 彼女の正体（前書き）

どうも、コクロールです。

怪我しました（笑）左手に切り傷、二針縫いました（笑）

わははははは

ふう、それでは三話目どうぞ

第二話 彼女の正体

「それにしても…………あの声は何だったんだ？」

俺はさっきからその事ばかり考えていた、というかそのことしか頭になかった。

（夢にしてはハッキリしていたし……………）

「やっぱり、確かめるしかないのか？」

そういつて俺は目の前にある裏山を見据えた。さっきから頭の中で響いているのだ

『助けて…………』

さっき見た夢の中で出会った彼女の声が…………

「とりあえず行こう」

そういつて俺は山に入って行った。

ゝ裏山ゝ

「うゝん」

やばいな……迷った。どうしよう……。おかしいなきちんと真っ直ぐ行つた筈なのに。

自分でもこんな方向音痴だとは思わなかった。

「……とりあえず真っ直ぐ行くか」

こんなとき妹がいてくれたら道に迷うことがないのに……。

『……………助けて……………』

「!?!……………こっちか」

声が聞こえる方向へ草を掻き分け急いで走る。

ガサガサッ

「見つけた……………ってあれ?」

視界が開け、少し広い場所へとたどり着いた俺。しかし、そこにあったのは墓石だけだった。

不思議に思いつつも声がしたのはこのあたりだったので俺は首をかしげ、

「何だ」

やっぱり空耳だったか。

そうつって踵を返し元来た道を帰ろうとすると、

——キンッ——

謎の耳鳴りが響いた

（うつ、何だこれ……頭が……いてえ……）
俺はそれを聞いたとたん、体が鉛のように重くなりその場に崩れるようにして

ドサッ

……倒れた

「……うん……あれ？俺は……ッそうだ！あの音で……」
気絶していた俺が目覚めると、そこにあつた墓石が無くなってい

るのに気がついた。

「あれ？さっきまであった墓石は？」

なくなつた墓石を探そうと辺りを見回すと、すぐ近くに見知らぬ女性^{せい}がいた。

『あつ……あの……』

と、。和服に身を包んだ女性はこちらを見つつその澄んだ声で尋ねてきた。でも、どこか子供っぽい印象を俺は持った。

「……」

先ほどまでいなかったのに突然現れた女性に俺の頭は処理が追いつかず、少し停止してしまった。

『あれ？聞こえないのかな？』

女性は首をかしげて頭に疑問符を浮かべてる。

「……えー……」

何がおこつた？墓石が消えたと思つたら女性が現れてしかも話しかけてきてるし、いや……それ以前に何かこの人少し透けてる気がするし……って足がない！！

『あ、聞こえてましたか？よかったです、来てくれたんですね』

「……は？」

来てくれた？もしかして……こいつが呼んでたのか？

『来てくれてありがとうございます。私は マダガスカルジャスミン^{しおひ}の詩織と申します』

「う……あ……俺は、黒鎚陽炎だ、黒でいい」

緊張のためかもしくはいきなり出てきたこいつに対しての恐怖から

なのか喋ることができなかった。

『黒鎚さん……黒様が助けてくれたのですね!!』

「いや、俺は『ありがとうございます!!』……うお!?!……」
話してる途中で遮るな、と言いかけたが彼女……詩織がいきなり抱きついてきてその勢いのまま俺は倒されてしまった為口にすることができなかった。

『すみません、嬉しかったのでつい／＼／』

と、先ほどまで抱きついていたら詩織がほを染めつつ申し訳なさそうに謝ってきた。

「……ま、まあ、気にして、ないし、大丈夫だし、うん」

『あわわ、本当にすみません』

かわいい女の子もしくは綺麗な女性にいきなり抱きつかれその後に押し倒されそのまま密着する形になっても落ち着ける人がいたら出て来い……。

「そのことは置いて、何でここに俺を呼んだんだ？」

さっきまでのことは水に流すことにして、俺は気になったことを聞いてみることにした。

『……あつ、はい、そのことですね』

「ああ、それが分からないと此処に来た意味が解らないからな」

『まず、そこにあつた墓石ですが』

といって、先ほどまで墓石のあつた場所を指差す詩織。

『あれ実は、私なんです』

「……………は？」

第二話 彼女の正体（後書き）

今回登場した花

ゝマダガスカルジャスミンゝ

花言葉 ・ 清純

・ ふたりで東方へ

第三話 過去

「……………えーと？」

何を言ってるんだ？墓石は実は自分だったって言われても信じれるわけないだろう。

『あ、信じてませんね』

「いや、信じるもなにもどうしろっていうんだ？」
そう言ったとたん詩織は俯いて何かを呟いていた。

『……………私だって……………』

すると詩織はぽつぽつと話し始めた。

〈数百年前・詩織視点〉

私はある村で生まれたごく普通の子供でした。

親は物心ついたときにはいなくて、小さい頃はいつもおじいちゃんとおばあちゃんと一緒にいたんです。

だけど、おじいちゃんは私が七歳のころに病気で亡くなりました。

「おばあちゃん、ただいま」

封印される少し前。私は体が弱っているおばあちゃんに代わって、買い物を終えて帰ってきたところでした。

「……ああ、おかえり詩織、うつ、ゴホッゴホッ」
おばあちゃんもまた病気にかかって寝たきりの生活になってしまいました。

「無理しないでおばあちゃん、今ご飯作るからね」

「ああ、すまないねえ、私が少しでも元気だったら」

「いいの、おばあちゃんは寝てて、今、晩ご飯作るから」

こんな感じでいつもやってるやり取りも終わって、ご飯を食べようとしたとき。

ダンッ

「じゃまするぞ」

そう言って入ってきたのは、この村の村長と奇妙な格好をした男の人達でした。

その人達は私とおばあちゃんを取り囲むと、私に向かって

「詩織よおぬしを封印する」

そう言ってきました。

第三話 過去（後書き）

投稿が遅れてすみません。

つい夏休みということでした。

実を言うとこの物語は先に進むにつれてシリアスが増えるんですよ。
ほのぼのでいきたいのに何でだろう？

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1931u/>

花の少年物語

2011年10月8日06時10分発行